

秋水通信

第33号

2022.12.15

幸徳秋水を顕彰する会
〒787-0010 四万十市古津賀4-41
四万十市生涯学習課内

ホームページ
http://www.shuusui.com/
090-6827-9129 (田中全)
メール:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

追悼 秋水の孫 真野寿美子さん

真野寿美子さんが五月二四日、埼玉県草加市の自宅で亡くなりました。九六歳。

寿美子さんは一九二五(大正一四)年八月生まれ。旧姓は小谷で母は小谷ハヤ子。ハヤ子は秋水の血を引く子である。秋水は中央新聞の記者時代、一九九六年頃(明治二九年、二五歳)、福島県安積開拓地に移住していた旧久留米藩土西村正綱の娘のルイ(別名朝子)と結婚したが、すぐに離縁した。しかし、ルイは秋水の子ハヤ子を宿していた。ハヤ子はルイの再婚相手、横田与八の籍に入れられ育てられた。

ハヤ子は一九二三(大正一二)年、小谷清七と結婚、六人の子を育てた。寿美子さんはその一番上の長女である。秋水のことは長らく家族限りの絶対の秘密であった。



秋水墓前で
車イスの寿美子さんと
妹比佐子さん
2016年5月11日

一九八二(昭和五七)年七月、朝日新聞のスクープでハヤ子の存在が世に知られた。幸徳駒太郎(秋水の義兄)の孫の幸徳正三さんが高知市からかけつけて対面、「秋水とそっくりです」の言葉を残している。ハヤ子は翌年八一歳で没。

秋水顕彰会としては事務局長(田中全)が二〇一六年一月、初めて寿美子さんを訪問。それがきっかけになって同年五月、寿美子さんと夫婦は妹の犬竹比佐子さんと夫婦を誘って四人で秋水の墓参に見えられた。秋水刑死から一〇五年、初めての肉親の墓参ということで地元各紙で大きく報道された。

当時九〇歳、車イスの寿美子さんは、秋水資料室や絶筆碑も見られ、「最後になると思いますが、遠かったが来てよかった」としみじみと語っておられた。東京から幸徳正夫さん(正三さんの次男)、大岩川嫩さん(大逆事件の真実をあきらかにする会世話人)もみえ、正夫さんは秋水墓前において、幸徳家を代表して秋水がルイを離縁したさいの非礼を詫びるといふ歴史的場面もあった。(本誌二一号掲載)

訃報 長尾正記さん

秋水の義兄駒太郎の生家長尾家(久保川村、現四万十市)の実兄林太郎のひ孫。四月二五日逝去。一九四三(昭和一八)年生まれ、七九歳。幸徳正夫さんの「またいところ」。秋水顕彰会会員。

絶筆碑

—— 目立つ看板建てる ——

市内為松公園にある、秋水が死刑判決の日、獄中で書いた絶筆碑(一九八三年建立、刑死七〇年記念事業)に一〇月四日、大きく目立つ看板を、碑と解説板の間に建てました。



幸徳秋水刑死一一二年記念墓前祭
日時 二〇二三年一月二四日(火)
午後〇時三〇分

場所 正福寺 四万十市中村山手通五一
記念講演 午後二時から
市立文化センター大会議室

講師 田中全
演題 幸徳家を継いだ人たち

主催 駒太郎、武次郎、富治
幸徳秋水を顕彰する会

管野須賀子墓前祭

日時 二〇二三年一月二八日(土)
午後一時

場所 正春寺

主催 東京都渋谷区代々木三一二七―五
大逆事件の真実をあきらかにする会
の部屋が借りられず今年も開けません。

第五回大逆事件サミット in 神戸

日時 二〇二三年五月二七日(土)
午後一時

場所 兵庫県学校厚生会館(元町駅近く)
神戸市中央区北長狭通四一七三四

内容 講演、各地報告、交流会など
二八日は小松丑治、岡林寅松の足跡を訪ねます。

主催 大逆事件の犠牲者たちの人権回復
を求める全国連絡会議
大逆事件を明らかにする兵庫の会

幸徳秋水研究会

日時 毎月第二日曜日 午後一時三〇分
場所 四万十市立文化センター会議室

内容 都合で社会福祉センター会議室に
なることも(要確認)
毎月テーマを変えて。現在は五月
より中江兆民『三酔人経綸問答』
を輪読中。

主催 幸徳秋水を顕彰する会

(田中全)

幸徳秋水と私

秋水のひ孫 小谷 美紀

ロシアのウクライナ侵攻から早くも三、四か月が経とうとしています。一説にあるようにプーチンは本当に精神異常をきたし、狂気の独裁者になっているのでしょうか。忠実な部下をつるし上げ、誰も逆らえないという恐怖政治は、もはやナチスドイツと同じ様相を呈しています。

国内の言論統制は日々厳しくなり、ロシアに住む外国人も対象として、ウクライナ情勢を客観的に報道することを違法行為とする法律を成立させました。フェイスブックやツイッターも遮断され、テレビ・ラジオ局も解散や活動停止に追い込まれ、ジャーナリストが脅迫や暴力にさらされ、数人は暗殺されています。言論統制の下、圧倒的な支持を得ているプーチン政権を批判すること自体、自分自身、家族、親戚、友人などの身に危険を招き、多数派から「売国奴」「裏切り者」扱いはされるのです。言論、表現の自由、報道の自由が当たり前のことと思ってきた私たちがとって、大きな衝撃です。



秋水の子ハヤ子と孫の美紀さん 1974年
2枚とも美紀さん提供



秋水の最初の妻ルイ 美紀さんの曾祖母
没年 1973年

しかし考えてみれば、日本でも第二次世界大戦時、厳しい言論統制を敷いた過去があります。戦争遂行の為、異論は許されなかつたのです。国家や軍に逆らえば、非国民や国賊のレッテルが張られ、特高警察や憲兵の監視、尋問そして拷問が日常繰り返された歴史がありました。ただかか七〇〇八〇年前の話です。

その時代から更に四〇〇五〇年遡った明治四一（一九〇八）年に天皇、皇后、皇太子など皇族を狙って危害を加えたり、加えようとする罪、いわゆる大逆罪が制定されました。政治制度として天皇制を重視した大日本帝国憲法下の日本政府は大逆罪を重罪とし、死刑・極刑をもって臨みました。

そんな折、明治四三（一九一〇）年、信州の社会主義者宮下太吉ら四名による明治天皇暗殺計画が発覚し、逮捕された「信州明科爆裂弾事件」が起こりました。この事件を口実に全国の社会主義者、アナキスト（無政府主義者）に対して取り調べや家宅捜索が行なわれ、根絶やしにする弾圧を政府が主導、フレームアップ（政治的でつち上げ）したといわれています。数百人の社会主義者・無政府主義者の逮捕・検挙に始まり、検察は二六人を明治天皇暗殺計画容疑として起訴し、充分審議されないまま、死刑二四名、有期刑二名の判決が下され、一週間後に一二人が

処刑されました。この二人の中に、この事件に関与していないが、すでに社会主義者として著名であった幸徳秋水が含まれていました。私の曾祖父です。

敗戦後、新たな資料などが発見され、一九六〇年代より「大逆事件の真実をあきらかにする会」を中心に、再審請求などの運動がおこなわれましたが、最高裁判所は昭和四二（一九六七）年以降、再審請求棄却及び免訴の判決を下しました。戦前の特殊な状況下の事例で、現在の法制度に照らし合わせる事が出来ないとの判決ですが、これは事実上の冤罪の確定と受け止められています。

私のルーツである高知県四万十市中村には幸徳家のお墓もあり、「幸徳秋水を顕彰する（功績や善行などをたたえて広く世間に知らしめる）会」の皆様の手によって、とてもきれいに管理して頂いています。

私も五年ほど前に「顕彰する会」の皆様のご招待で、当地を訪れ、お墓に参ってきました。また、中村の市立図書館にある「幸徳秋水資料室」を見せていただき、大きな秋水の写真の下に曾祖母ルイの写真を取ってきました。

幸徳秋水、この名前が自分に関わりがあると知ったのは、中学二年（一九八二）の頃でした。幸徳秋水は、大逆事件の首謀者として処刑されたと授業では習ったのですが、それがどのような事実であれ、教科書に載る人物が自分の曾祖父であったことに、私は少し誇らしく思った記憶があります。勿論、大逆事件を起こした人物が祖先であったことを誇らしく思いたわけではなく、自分の曾祖父が歴史上の人物であったというその事実が、おそらく私の自尊心をくすぐったのでしよう。

この頃「秋水に忘れ形見」として祖母ハヤ子のことが朝日新聞に載ったこともあり、その翌日、普段は話したこともない社会科学の先生に職員室へ呼ばれ、新聞を見ながら、「これは、小谷のおばあ

ちゃんか？」と、尋ねられました。後で聞くと、姉も同じように聞かれたそうです。

なんとなく嬉しい気分が家へ戻ると、父は普段見せない本面に苦しそうな表情をしていました。当時まだ、幸徳秋水といえ、冤罪の被害者というより大逆事件の大罪人という印象が色濃く残っていましたので、軍国教育で育ってきた父には大罪を犯して処刑された張本人が自分の祖父という事実が公になってしまったことを容易に受け入れられなかったのだと思います。その時私は、そんな父の思いを理解できていませんでした。つらかったと思います。

そんなことで過去の多くを語ってくれない父でしたが、今もお逸話として語られている曾祖父夫婦の離縁について聞かせてくれたことがあります。おそれなく父は祖母にあたるルイや母であるハヤ子の口から伝え聞いたものであろうと思っています。

曾祖母ルイが秋水へ嫁いだころ（明治三〇年）、秋水は既に国の方針に疑問を持ち、社会主義を掲げる著名なジャーナリストとして活発に活動しておりました。曾祖母に弾圧の手が延びてくることを危惧した両親によって連れ戻されたルイは、そのまま秋水のもとへ戻ることなく、離縁という形になったとのこと。学がなく、美人でもない田舎娘故に離縁されたという一説もありましたが、本当のところはかなり異なっていました。その後、ルイは秋水の子を身ごもって



美紀さん、ルイの写真と秋水資料室へ寄贈
2017年5月



美紀さんの歓迎会
顕彰会メンバーで
前列左端は岡崎悦明さん
(輝の孫) 2017年5月

いたことがわかりましたが、横田与八と再婚、間もなく私の祖母であるハヤ子が生まれます。祖母は体が弱く、成人しないかもしれないと言われていたそうです。父が長男だったため、私が物心ついたときは祖母と一緒に暮らしていました。祖母ハヤ子は、朝日新聞の「秋水に忘れ形見」のスクープ記事が出た翌年、私が中学三年の夏に亡くなりましたが、躰に厳しい反面、我が家の就寝時間を過ぎた時間のテレビ番組をこっそり部屋で見せてくれるという、優しいところもありました。

私は、子供の頃、叔父に連れられて、何度か曾祖母の家に遊びに行ったり、病院にお見舞いに行ったりしています。曾祖母は、とても上品で優しい人であった事を鮮明に覚えています。

今でもそうですが、人見知りの激しい私は、このような時にどう接して良いのか分からず、姉のように歌を歌ってあげたりという事を容易にできず、幼いながらも身の置き場に困っていたように記憶しています。時には病室に入ることも拒み、叔父の車の中で待っていた事もしばしばありました。今思えば、あの時にもっともつと曾祖母と話をしておくべきであったと後悔しています。

後に、「幸徳秋水を顕彰する会」の方々の働きにより、冤罪事件と改められることになりましたが、どの程度、世間の認識が改められているかはわかりません。

高知県四万十市中村には、幸徳秋水の史跡などが残っており、市を挙げて盛り立てていただいていますので、高知県を訪れた際には、中村へ少し足をのびして欲しいです。秋水の墓は、裁判所の裏の正福寺にあり、春には、秋水を悼むように桜が咲き誇り、この桜は裁判所の「秋水桜」と名付けられています。桜の下で、曾祖父が昔のままの風情で訪れる人を迎えてくれている事でしょう。

(注) 関東電線販売協同組合発行「協組

だより」(一三〇号、二〇二二年六月発行)より転載(写真を除く)。小谷美紀さんは自身のフェイスブックのプロフィールに秋水のひ孫であることを書いています。

◆◆◆◆◆

四面より続く
と勉強しろ」と。父は鶏が好きで、家にはしゃもを飼っていた。

・兄(伝次郎)は、おぼさん(英)にこんな世話になってどうして恩返ししたらしいのかと言っていた。母は伝次さんが立派なお嫁さんをもらっておぼさんいままでもお礼しておくれや、と答えた。

・父は日本新聞に入り、その後後藤象二郎の紹介で金沢郵便局長に。しかし、病気がなくなり東京に戻ったが、戻ってから元気がなくなつた。銀冠の杖をついて散歩していた。父はかっつけを患っていた。

・いつも師の谷干城をたずねていた。頼んだことがうまくいかなくとも不平を言わなかった。伊藤博文派から谷と手を切ればと誘惑もあったが、拒否した。

・父は病気の養生のため伊田村の小野に嫁いでいた妹仲のもとへ一人で帰る途中、神戸の摩耶山麓で自殺した。遺書に「兄(戒平)を頼れ、子二人をたのむ」。母は赤坂の兄の膝で泣き崩れた。一番の原因は病苦。次に自由党からの債務の追及、求職の不調。

・父の墓は最初に神戸、後で大阪長柄に移した。昭和一〇年、私は一部を掘り出した。忘れもしない白い歯があった。

・父は兄戒平に愛情をもっていたが、母はうらんでいた。多治は憎んでいた。戒平から安泰だったのは、小姓町の桑原と、安岡新宅(良哲)だけ。

・母は姉、私を連れ房州(千葉)南三原村で教員に。十年いた。夏休みには、伝次郎、安岡秀夫らが海に泳ぎに来た。姉は千葉の師範学校へ。私はあとで東京の保母養成学校へ。

・私らが東京を離れるころ、幸徳の兄は

しばしば母につぶやいた。「罪なくしてみる配所の月」、此の兄は父の死を母の苦勞をまざまざとみて、つくづくと社会の欠陥がわかったのだ、そしてそれが他日、社会主義者となる一原因に発展したのだといふ。

・日露戦勝記念に中村の有力者が幼稚園をつくることになり、母は園長として迎えられ帰郷した。その時の幸徳駒太郎の言葉。「てるさんよ、おまんになにかわしのことを悪くいうものはいないか。わしが桑原と小野の財産をとって幸徳をようにしたというかもしれないが、それを信じたらいかなげ。オンちゃんも幸徳の財産を取り返したのは、そのころはやりだした石油にめをつけ、大儲けをしたからじゃ。わしはおまんのおとうさん、おかあさんようにしておもらいした。お二人はわしが字を知らんでもちつともやしべる(軽蔑)ことはせんかった。よう親切にしてつかさつたけん恩はわすれん。テルさんよ、おとうさんがおらんでもオンちゃんがついている。不自由はさせせん、ほしいものがあったら何でもこうちやるけん」とじゅんじゅんと説いた。私は駒おじさんの誠意をかみしめてきた。幼稚園にも協力してくれた。中村名物の暴風雨となると、男衆が走ってきえてくれた。家一つくらい建ててあげならんのじゃけん」と小谷の土地をタダ同然で提供してくれた。

・中村に戻ってからすぐ、幼稚園を手伝っていた姉の武良が死んだ。

・母は幸徳の伯母(秋水の母)と安岡の伯母(良哲の妻)によくつかえた。二人もよく家に来た。

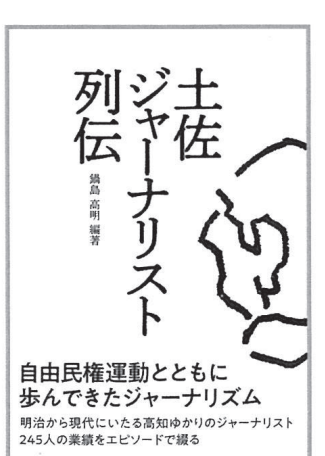
・私は町の人から「お嬢さん」と呼ばれた。道一は中村で尊敬されていた。

・甥の環(達の次男)が名古屋で倒れた時は伝次郎の妻千代子の姉が松本検事の妻になっていたので助けてもらった。

(幸徳秋水を顕彰する会総会記念講演の要録、二〇二二年五月二八日、四万十市立文化センター中会議室)

図書紹介

鍋島高明 土佐ジャーナリスト列伝



昨年亡くなった鍋島さんの遺作(編著)。高知市(旧介良村)出身、元日経新聞編集委員、本会会員。高知県人関係の出版が多く、「幸徳秋水と小泉三申」では秋水の実子ハヤ子についても書いている。本書は「高知経済人列伝」(二〇一六年)の兄弟作。政治、文学等を含む幅広い分野から二四五人を紹介。

鍋島さんが土佐の三巨人と言っていた秋水、兆民、涙香のほか、秋水と縁のある人物では、横田金馬、奥宮健之、田岡嶺雲、安岡雄吉、安岡秀夫、中島及大野みち代は入っている。予定されていた幸徳富治が手違いから漏れたことが惜しまれる。

幸徳富治(一九九一〜一九六七)は秋水の甥(義兄駒太郎の長男)で、秋水の遺志を継ぎ、一九一五年、中村で土南新聞(のち南国新聞)を発行、「幸徳家当主」「秋水後継」を名乗り、秋水の復権、名誉回復に生きた。

高知新聞刊、三〇八頁 一三〇〇円。

■左山遼 真冬のレクイエム

本会副会長、尾崎清著。二〇一一年出版(副題「幸徳秋水没後百年追悼エッセー集」)がこのほど電子書籍化されました。ネットでも読めます。

「父と母を語る」岡崎（小野）輝のノート見つかる

秋水の思想形成に衝撃を与えた親戚の不幸

田中 全

二〇二一年秋、高知県黒潮町（旧大方町）伊田の小野嘉子さん宅の古いタンスの奥から四冊のノートが出て来た。小野家は秋水の母の多治が生まれた四万十市（旧中村市）山路の小野家の分家にあたる。表紙には「父と母を語る」とあった。

これらは嘉子さんの母の喜美恵さん（故人）がいとこ半にあたる岡崎輝（一八八九〜一九六八年、中村生まれ、旧姓小野、結婚後大阪豊中市）から時期不明ながら託されたものと思われるという。

輝の父、山路の小野道一（どういつ）は多治の弟であり三歳の時、蔵岡の桑原家（父義厚、兄戒平）から小野家の養子になっていて、輝の母の安岡英（ふさ）は明治九年熊本神風連の乱で殉職した初代熊本県令の安岡良亮の娘である。小野、桑原、安岡の三家はいずれも士族格の庄屋、郷土の家柄であり、互いに濃い姻戚関係にあった（道一と英、良亮と多治はいとこ）。輝も秋水の一八歳下のいとこであり、秋水を兄と呼び慕っていた。

文筆を得意としていた輝は、敗戦直後の一九四七年、「従兄秋水の思出」（秋水全集別巻所収）を書いたほか、中村の「南国新聞」にもたびたび寄稿をしているが、このノートには家族の歴史をさらにこまごまと書いている。四冊はそれぞれ五十二〜六十ページで



小野道一、輝、姉・武良
明治28年頃 父自殺直前
小野嘉子さん提供

万年筆の字がびっしり。公開を前提にしていなかったためであろう。晩年、身につまされるような思いを書き綴っている。秋水もあちこちに出てくる。豊中の家の自分の部屋には秋水の大きな写真を飾っていたという。

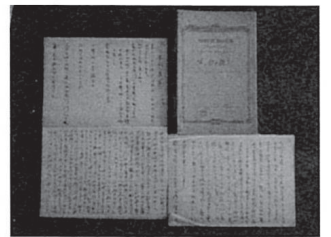
秋水は兆民の書生となり、東京で英学塾に通っていた頃、破産して中村にいらなくなると出て来た道一一家族と二度同居している。今回のノートでははっきりわかったことだが、その時、明治一八年、道一は困窮と病氣から自殺をした。

秋水は「予は如何にして社会主義者となりし乎」（平民新聞十号、一九〇四年）で境遇と読書の二つをあげ、「境遇は土佐に生まれて幼より自由平等説に心酔せし事、維新後一家親戚の家道衰ふるを見て同情に堪へざりし事、自身の学資なきことの口惜しくて運命の不公を感じし事」とあるが、輝はこの中の「一家親戚の家道衰ふる」は自分たちのことだと書いている。

私は以前から秋水の思想を考えるにあたっては、幼時からの家庭環境、特に母方の親戚との関係がポイントになると考えていたが、このノートはそのことを裏付けており貴重な記録と言える。近年中に活字化して公開を予定しているが、以下抜粋して重要な記述を紹介したい。



前の左・母英、中の右・輝
昭和12年頃 豊中市岡崎家
岡崎悦明さん提供



発見されたノート4冊

・秋水の母多治は小野家の三人姉妹の長女。当時は階級社会で小野は士族の安岡、桑原、和田、下村と婚姻。型破りは医師の父雲了が長女を幸徳（平民）にやつたこと。次女嘉弥子は安岡良哲（良亮の弟）と、三女伊弥子は養子にもらっていた道一と結婚。雲了は山路から中村の「お米倉あと」に転居。

・道一は十八歳まで医業の勉強。十九歳で板垣退助を訪ねたが容れられず、谷干城にしたがって上京、大学南校に入る。

・安岡のお家芸は弓術。祖父故五郎は代々医者で領地は多くはないが、古津賀、奥御前方面にあった。小作に充てていた。番が来れば、お山方、参勤交代のお供、堺、大阪屋敷詰もあった。

・安岡良亮は官に入り一家で上京、駿河台の旗本瀧川播磨守旧邸（今の明治大学前）に入った。英は有栖川宮の大奥に入ることになったが、いとこの伊弥子が娘の達を生んで突然死んだのが気の毒で道一と結婚。

・良亮は高崎県、渡会県（伊勢）、白川（熊本）に赴任。道一も渡会、三藩（久留米）、鹿児島に赴任。渡会では親子一緒。隣家は良亮の部下の尾崎行正で尾崎夫婦が英の産婆役。その長男にやんちゃな彦太郎（行雄Ⅱ号堂）がいた。

・良亮は神風連の乱で殺ぬ直前、柿が好きなので死んだら供えてくれと言っていた。また、上に立つものは大きな石が落ちてきたら全力でこれを支えてあげない

と、下の者が安心して働けないとも。英は三藩から鹿児島に移る前、乱の前日、熊本の桑原戒平宅で父に会っていた。熊本の良亮の墓には尾崎行正が献じた名入りの花崗岩の花筒がある。優れた人は義理堅い。安岡、尾崎は伊勢を永住の地として土地を求めていた。尾崎は東京にいた良亮の家族を中村に伴ったあと伊勢に戻った。

・中村には宿毛に負けない英才がいた。桑原平八、沖本忠三郎、遠近武則、三浦介雄など。しかし、安岡が死んだので道がなくなつた。

・道一は鹿児島で判事に。西南戦争のさい大山県令に同調、西郷支持の天皇への判事連名嘆願書に名を連ねたため、一時、長崎に謹慎させられた。英が会いに行つて東京に戻り、大審院に入る。

・良亮に従つて熊本に行つていた桑原戒平（道一の兄）は西南戦争後中村に帰り、事業（同求社）を始めたが失敗し、兄弟、親戚を巻き込んだ（幸徳も）。

・父もなぜ大審院をやめて戻つて来たのかわからない。兄のため、養父の老後をみるため、洋々たる政界を捨て自ら葬つた。世の中、義理ほどつらいものはない。

・父は同求社の事業は国策のようなものだから県から金を借りた。このわずかな金が最後まで父を苦しめた。自由党に迫及された。命取りになった。県議をやめ、裸になった。破産し国会出馬を片岡直温に譲つた。その頃、私の兄の新が死ぬという不幸が重なつた。

・父も母も兄戒平の事業には反対だったが、最後は協力した。政敵の林有造は父が死んだとき「惜しい男を戒平が手にかけたものよ」と嘆いてくれた。

・上京後同居の秋水は姉の浄瑠璃、三味線の稽古を見にきてからかっていた。田舎源氏など軟文学にも手を出して父に叱られていた。「オンシはゴクドウじゃ、もつ三面二段に続く